

家庭集会について

－ 旭川豊岡教会の実践例から －

久世そらち

はじめに

家庭集会は、日本の教会の宣教活動において、きわめて重要な役割をはたしてきた。数多くの教会が家庭集会から産まれて来たとし、また、現在も全国の教会の多くで家庭集会が実際に営まれている。

しかし、家庭集会の実際やその意義についての専論は、これまで皆無に近かったのではないだろうか。家庭集会の実態についてすら、各個教会の外に報告される機会も乏しく、情報交換も充分に行われてきたとは言いがたい。教会において、家庭集会に関する知見は、極端なことを言えば百年前から変わっていないのではないだろうか。旭川豊岡教会に遣わされ、その家庭集会に関わるようになってから、このような「家庭集会論」の欠如を痛感し、手探りの中で自分なりに家庭集会についての理解をまとめようと考えてきたが、今回、旭川豊岡教会の家庭集会についての報告を求められた機会に、より一般的な家庭集会についての議論のための基礎的な枠組の構築を試みることにした。

したがって、本稿の論述においては、個々の家庭集会の歴史的経緯をのべるというスタイルをとらない。家庭集会をめぐるいくつかの視点を取りあげ、そのなかで個々の家庭集会の実例を紹介していくこととする。

1 旭川豊岡教会の家庭集会の変遷

1982年8月に発行された旭川豊岡教会の『伝道開始80周年記念誌』に、当時の福島恒雄牧師は「豊岡教会の家庭集会は七カ所で行われている。赴任当時、一つもなかったことを思うと、主の恵みにただ感謝するだけである」と記している。福島牧師の赴任は1971年4月であるから、旭川豊岡教会では10年余りの間に7つの家庭集会が発足したことになる。

この1982年当時の7つの家庭集会とそれぞれの発足の時期は以下の通りである。

○納内集会	戦後になって不定期に開催、福島牧師になってから定期に
○東川集会	不明
○豊岡・東光集会	1978年
○東神楽集会	不明
○留萌集会	1977年
○緑が丘集会	1974年
○神居集会	1980年?

10年後の1992年に発行された『伝道開始90周年記念誌』には、以下の7つの集会についての報告記事が掲載されている。

- 豊岡・東光集会
- 緑が丘集会

- 納内集会
- 神居集会
- 東川集会
- ドルカス会
- 松田家集会

さらに3年を経た1995年度中に開催された家庭集会は、以下の6か所である。

- 豊岡・東光集会
- 緑が丘集会
- 納内集会
- 東川集会
- 永山集会
- あそか苑集会

1982年の時点で活動していた7つの家庭集会のうち、豊岡・東光、東川、緑が丘、納内の4つが1995年現在も継続している。他の3つのうち、留萌集会は家庭集会から教会へと発展し、1986年に留萌宮園伝道所が開設されるに至ったが、東神楽集会・神居集会は現在では行われていない。

1982年以後に開始された集会のうち、ドルカス会・松田家集会は、いずれも死去した教会員の記念の意味をもって遺族の家庭で始められた記念会的性格のものである。この2集会は1995年には行われていない。

永山集会は、永山地区在住の信徒数名が、永山で集会をもちたいとの希望を抱き、準備の後、1993年度に発足したものである。

あそか苑集会は、やや特殊な内容の集会である。あそか苑は、旭川市の北の比布町の特別養護老人ホームである。ここに入所しているひとりの旭川豊岡教会の信徒を、数名の信徒が定期的に問安をするようになった。やがてこの問安が婦人会の働きとして位置付けられ、さらに現在では教会の伝道委員会の担当となって毎月訪問するようになっていく。問安の際、訪問者と入所している信徒に同室の方も交えて、証しを中心とする集会の形態をとるようになり、信徒中心の集会として継続している。年に何回かは牧師を招き、95年度には病床聖餐式をも行った。

2 家庭集会の形態

a 集会の日時

現在の集会のうち、ほぼ毎月一回の定例会としておこなっているのは、東川集会・あそか苑集会である。東川集会は第一金曜、あそか苑集会は最終火曜と定めている。納内集会も、本来は毎月第二金曜の定例会として継続されてきたものである。この集会は、教会員であった黄金井解三兄が、戦後、山林経営を志して深川市納内に移住し、周辺の農家などの人々を集めて集会をもつようになったものである。その後、子息の黄金井敬兄がひきついでが1983年に召天、妻の黄金井政子姉が集会の世話にあたってきた。しかし、近年は黄金井姉も体調を崩し、気候の厳しい納内の山中の自宅に滞在するのは夏季のみになり、集会もその時期にしか持たれていない。

そのほかの豊岡・東光集会、緑が丘集会、永山集会は、2～6か月に一回の不定期の開催となっている。集会の時間帯については、午前中に行われるあそか苑集会をのぞくほとんどが、夜7時からの開催と

されてきた。これは、職業をもっている人々にとっては出席しやすい時間帯であり、とくに農村地域にある東川集会・納内集会では、農家の人々が一日の農作業を終えてから集ってくる姿が見られた。

一方、信徒でない家族をもつ主婦にとっては、むしろ日中の方が出席しやすいという意見もあり、不定期の集会には日中の開催を試みているところもある。

b 集会のある地域

現在の6つの集会のうち、豊岡・東光集会、緑が丘集会、永山集会は、旭川市内の住宅地域で行われている。これらの地域に在住する教会員も多く、教会周辺地域とすることができる。

また、あそか苑集会、東川集会、納内集会は、旭川市に隣接する町・市で行われているものであり、とくに東川集会、納内集会は、農村地域での集会という色合いの濃いものである。

c 集会をもつ家庭

集会をもつ家庭については、前述のあそか苑集会を除くと、大きく二通りの場合がある。ひとつは、特定のある信徒の家に固定して行われるものであり、もうひとつは、数名の教会員の家で回り持ちで行うものである。現在の集会でいえば、東川集会・納内集会は前者にあたり、豊岡・東光集会、緑が丘集会、永山集会在後者にあたる。

特定の家固定して集会を行う場合、集会がその個人の信仰的情熱に依存する度合いが高いということがいえる。集会を開くことは相当の負担をとまなうことであり、定期的に、しかも長期間にわたって集会を継続することは、それだけで信仰の大きな証となると言えよう。そして、定期的に一定の場所で教会の集会が開かれるということは、その地域に対して集会の存在をアピールしていく上でも大きな意義のあることといえるだろう。

東川集会の場合、旭川市に隣接する東川町在住の田中義章兄・田中晴子姉夫妻の家で20年以上も継続されてきた。田中兄の地域に対する熱心な働きかけもあり、この集会から受洗に導かれた人は数多い。また、田中兄の個人的関係から農業関係者の出席が多いこともこの集会の特徴であった。しかし、1994年になって、田中夫妻から、集会の負担が健康上難しくなったので集会を閉じたいとの申し出があった。このとき、東川町在住の教会員が相談した結果、この集会から一家が信仰に導かれた西原家で集会を継続することとなり、毎月の集会を引き継いで現在に至っている。

家庭集会を回り持ちで行う場合には、一軒あたりの負担は軽減され、より多くの信徒もしくはその家庭が、教会のわざに参画する喜びを味わう機会を得やすくなる。また、ある家庭が何かの理由で集会を開催することができなくなっても、集会自体は継続することができるため、長期にわたって集会が存続しやすいと思われる。

前述のように、永山集会は、はじめからこの回り持ちでの継続を前提として発足したものである。永山地区に在住する教会員が数名あり、それぞれに集会を持ちたい志はあっても毎月自宅で開催するには困難な状態であった。しかし、そのような幻を互いに語り合う中から、回り持ちで開催する集会として永山集会を発足させることができた。1995年度の場合、3軒の家庭で集会が開催されている。

このような回り持ち方式にする場合、特定の主催者がいないので責任の所在があいまいとなる可能性もある。また、開催場所・時期について適切なコーディネイトが行われなければ運営に円滑を欠く恐れもある。現在、場所の固定している集会が定期的に開催されているのに対し、回り持ち方式をとる集会が不定期の開催となっているが、それも、この形式にとまなつてのことであるかもしれない。集会の時期・場所が固定していないことは、地域へのアピールという点ではデメリットもあると考えられる。

d プログラム

集会のプログラムは、とくに定めているわけではないが、おおむね以下のように教会の祈祷会に準じたものとなっている。集会の司会には、その日の場所を提供している家庭の信徒があたる場合もあれば、別の信徒、あるいは牧師があたる場合もある。

- 黙祷
- 讃美歌
- 祈祷（司会者もしくは指名された1名）
- 聖書朗読（司会者、または輪読）
- メッセージ（牧師から、または信徒の証しなど）
- わかちあい（メッセージに関連しての質疑や懇談）
- 讃美歌
- 祈祷（1～5名ほど、全員が祈る場合、省略する場合もある）
- 主の祈り

この後、茶菓をいただきながらの懇談となることがほとんどである。

e 出席者

現在、家庭集会の出席者の数は、どの集会の場合も、ほぼ10～20名であるが、その大部分は教会員である。

教会員でない出席者についてみると、納内集会では、地域からほぼ継続して出席している人々が8名ほどあるが、その他の集会では、教会員の家族以外での継続的な出席者は、きわめて少数である。集会を行うごとに、信徒たちが名簿によって案内を郵送したり直接声をかけたりして、教会員でない出席者を誘っているが、なかなか定着しないのが現状である。

教会員の場合には、自分の居住地域での集会のほか、他地域の集会にも出席するケースが多くあり、そういう信徒の多くは教会の礼拝のみならず水曜の祈祷会をも大切にしている人々である。つまり、旭川豊岡教会の場合、教会の礼拝・祈祷会を守っている信徒の何名かが、各地域の家庭集会をも巡回するようによく出席し、その地域の信徒やその家族との交わりを深めることによって、教会の一致と交わりを育んでいるという構造をみることができるのである。

3 家庭集会の目的・意味

家庭集会をもつことには、さまざまな目的や意味あるいは効果が考えられる。それらの目的・意味のうち、どれが強調されているかという重点の違いによって、家庭集会ごとに異なった特色が生じてくる。以下に、家庭集会のさまざまな目的・意味を挙げ、それが具体的な集会のどのような特色となって現れてくるかを述べる。

a 伝道

自宅で家庭集会を開きたいと願うとき、その目的として第一に意識されるのは伝道であろう。その場合、伝道の対象がより明確に限定されていることもある。

納内集会と東川集会は、地域への伝道の熱意をもって開かれてきた集会である。前述のように、納内集会は、納内の山中の農家への伝道を目的として始められ、現在に至っている。また、東川集会も、田中兄の地域への伝道の情熱によって支えられてきた。東川集会の場合、同じ東川町でも異なる地区にある西

原家に移ったことにより、以前の地域の人々とのつながりが薄れてしまっているのは、やむを得ないとはいえ、いささか残念なことである

他の集会の場合には、地域の広範な人々への伝道というより、職場や幼稚園・学校のPTAなどで個人的なつながりのある人々への伝道が意識されているようである。また、とりわけ家族への伝道を具体的に願って家庭集会を持とうとする信徒も多い。教会につながっていない夫や子どもが、自宅でそうした集会が持たれることをきっかけに、少しでも福音にふれ信仰について理解をもって欲しいという切実な祈りがある。家庭伝道というのとは少し異なるかもしれないが、クリスチャン・ホームであって子どもたちも教会に通い、場合によっては幼児洗礼を受けている場合でも、積極的に家庭集会を行ったり、子どもと共に出席したりすることが、信仰の確実な継承につながると考えている信徒も少なくない。

b 家の教会

北海教区とりわけ道北地区では、教会が近くになく主日ごとに教会の礼拝に出席することが困難な地域に信徒が在住する場合、その家庭で集会をもち、「家の教会」というべき位置付けを与えていくことが主張されて来た。

そのような「家の教会」としての家庭集会の典型的な例として、かつての留萌集会を挙げることができる。『伝道開始80周年記念誌』に、留萌集会について佐伯嘉美兄が以下のように記している。

留萌集会の種がまかれたのは1977年9月5日「近郊に住む信徒達の成長と交わりのために」と始められました。(略) 私が二年前に転入して来た時、留萌には所属する教会がないと聞かされホッとした一瞬もあったが、時が経過するにつれて物足りなさ、身体に風穴が開いたように感じたことを覚えている。前任地ではそんなに熱心でなかったのに不思議でならなかった。そんなことがきっかけで何が何でも聖日礼拝をとという願いが信仰を持続させているのかも知れません。月一度の聖日礼拝を待ち望みながら生活するという事は、今だかつてなかったことです。

この留萌集会から留萌宮園伝道所が設立されるに至ったことは、家庭集会の持つ重要な意味を証している。

c 信徒の交わり

メソジスト教会は、ウェスレーの時代以来、組会(class)の活動をその重要な柱としてきた。信徒を居住する地域ごとに小人数の組会に組織し、定期的に集会をひらき、リーダーのもと相互に信仰を励ましあうのである。旭川豊岡教会の前身である日本メソジスト旭川教会においても組会が組織されていた。教会員の数が多くなかったため、組会の数は多いときでも2つであったようである。1920(大正9)年に受洗した牧田みゑ姉によると、メソジスト教会の盛んな時期、組会は信徒の家庭の回り持ちで毎週金曜日に行われ、日曜の礼拝、水曜の祈祷会、金曜の組会と、教会の集まりが続いてたという。

現在の旭川豊岡教会の諸集会は、直接メソジスト教会時代の組会に連なるものではないが、その形態や機能には、共通する要素が多くあるように思う。

現在の家庭集会は、出席者の多くが教会員である。つまり、家庭集会では、地域ごとに教会員が集まって、聖書を学び、そして懇談の中で自分の信仰生活に関わる課題をわかちあい、相互に励ましあい、また祈りを合わせているのである。とくに、教会周辺地域にあたる豊岡・東光集会や永山集会は、このような性格が濃いものとなっている。こうした形は、かつての組会の姿からそう隔たっていないのではない

だろうか。家庭集会での信徒の交わりは、単なる親睦にとどまらず、信徒の相互牧会の場として、ひとりひとりを教会の枝として結びあわせ、教会を形成していくきわめて重要な役割を果たし得るものであろう。

d 問安

あそか苑集会は、老人ホームへの問安という性格をもつ集会である。納内集会の場合にも、旭川から離れた山中に住まう黄金井家を、集会の際に牧師や他の信徒が問安するという性格をもっている。とくに近年、黄金井姉が一年のうち長期にわたって自宅を離れて札幌で過ごしているので、黄金井姉が自宅に戻っている間、少しでも交わりを深めるためにと集会への出席を望む教会員もいる。

e 学び

どの集会の場合でも、聖書の学びが中心となってくることはもちろんであり、その部分についてはほとんど牧師に一任されているのであるが、その際、集会の性格に従って、テキストやメッセージの内容について配慮することを考えている。

納内集会や、田中家で行われていた時期の東川集会のように、農村地域への伝道的性格の強い集会の場合、福音書に記されたイエスの言動に集中して学ぶこととした。南米やフィリピンにおける解放の神学の実践の場である「キリスト教基礎共同体（ＢＣＣ）」を意識して、カルデナルの『ソレンチナーメの農民による福音書』をまねたディスカッションを試みたりもしてみたが、これは成功したとは言えなかった。

緑が丘集会は、ごく近隣に住む数家族の教会員が集う集会であるが、教会の役員・ＣＳ教師・オルガニスト・幼稚園職員など、教会の具体的な責任を担っている信徒が集中している。ここでは、テキストとして継続的にコリント書を取りあげ、直接教会形成につながる学びを意図している。

また、あそか苑集会では、毎回信徒の証しを中心としているが、このように、証を語ること自体、信徒としての訓練と考えることもできる。

f 記念

『伝道開始90周年記念誌』に、ドルカス会について、後藤憲太郎兄が以下のように記している。

登茂子が天に召された5年前の1987年8月8日以来、1年の間は毎月8日前後の午後、2年目からは3か月に1回、10名前後で小沢先生により妻を偲びつつ、短い感話と、み名を讃美する集まりを持たせて戴きました。(略)先生と相談の上、正式に教会の家庭集会として、この会の名で発足いたしました。

記念会としての意味をもつ集会としては、ほかに松田家集会があったが、いずれも現在では家庭集会としては開かれていない。

緑が丘集会でも、かつてこの集会のメンバーだった菅原欽也兄の召天の記念日である6月30日の前後には、妻の菅原ち江子姉が中心となって、その自宅で記念の意味をもあわせた集会をもつこととしている。

おわりに

旭川豊岡教会における家庭集会を具体例として、家庭集会に関して考察すべき諸点について述べてみた。本論集においては、他にも多くの家庭集会の実践例についての報告がなされるであろうが、それらについても、さまざまな視点から分類・整理して考察することが可能であると思う。

もとより、家庭集会について考察すべき重要なポイントでありながら、ここでは欠落しているものも多いことであろう。「はじめに」でのべたように、この小論が、より一般的な「家庭集会論」の構築のための議論のきっかけとなることを願うものである。